

AEGIS-Women イベントご報告（第79回日本消化器外科学会総会）

第79回日本消化器外科学会総会（現地会場開催とオンデマンド配信）にて、2024年7月18日にAEGIS-Women イベント「キャリアアップ10ミニッツセミナー PART19」を開催いたしました。本セミナーは AEGIS-Women 会員ページにて動画配信しております。



AEGIS-Women 会員専用コンテンツ 動画サイト

<https://www.aegis-women.jp/member/index.html>

「キャリアアップ10ミニッツセミナーPART19」



司会：星薬科大学 医療薬学研究室
野村 幸世 先生

1. 「働き方改革から始まったチーム制が女性外科医の 産休・育休明け復帰を救う」

北里大学医学部 上部消化管外科学 比企 直樹 先生

我々の教室では、働き方改革施行前からチーム制を導入し診療を行ってきました。術中の食事交代、術者分担、術前・術後の説明などをチームで行うようにしたのです。アプリを活用した診療情報の共有や相談、チャットもチーム制を支えています。緊急対応は、少ない人員で賄えるようにオンコール体制を敷いています。



次にインセンティブについてお話しします。休日・深夜・時間外の対応は通常の1.8倍の診療報酬が算定できるので、これを医師に分配するべきです。日本消化器外科学会では、

理事長が各施設にインセンティブ導入を要請するなど努力しています。また、会議を勤務時間内に行えるように見直すなど、時間外労働時間を年間960時間以内に収める事を目指しています。

北里大学では、産休・育休明けのドクターの受け入れに真剣に取り組んでいます。例えば、出退勤時間を子どもの保育時間に合わせて調整できるようにしたり、執刀医復帰までの猶予期間などはそれぞれの希望を聞いて対応したりしています。焦らずに子育てをしてもらいたいという思いがある一方で、私は長期間手術から離れるべきではないと考えており、短時間でも手術に入ることを勧めています。もちろん手術参加が難しい時は無理をせずにその旨を伝えてほしいとも言っています。育休明けのある医局員は、私が伝えた「1日も早くオペを楽しむことを考えなさい」という言葉が深く心に刻み込まれたと言っていました。実際、当院では産休・育休明けのドクターも手術に参加しています。試行錯誤しているところですが、みんなが手術を含めて活躍できる環境を構築することが重要だと思っています。

最後に、日本消化器外科学会のワーク・イン・ライフ委員会が実施したアンケート結果についてお話します。「自分の子どもに消化器外科医になることを勧めたい」と回答した人は、わずか14%でした。この要因は当初不十分な賃金だと推測しましたが、それ以上に重大な要因は、消化器外科医の仕事が正しく評価されていないことだと思に至りました。産休・育休明けのドクターはもとより、全ての外科医が幸せに働けるような職場をつくりたいと思っています。

2. 「消化器外科における『令和モデル』の実現に向けて」

大阪医科薬科大学 一般・消化器外科
河野 恵美子 先生



「令和5年版男女共同参画白書」(内閣府)では、男性は仕事、女性は家庭という「昭和モデル」から、全ての人希望に応じて家庭や仕事で活躍する「令和モデル」への転換を提言しています。背景データによると、

専業主婦世帯は漸減していて、現在では共働き世帯の半数になっています。政府は、働き方改革を「一億総活躍社会」実現に向けたチャレンジと位置付けています。労働制度の抜本改革を行い、企業文化や風土を変えることを目指しています。医師も例外ではなく、2018年に厚生労働省が医師の働き方改革に関する検討会を始め、翌年には「働き方改革関連法」が成立しました。

勤務医対象の調査(2017年)では、若い世代ほど労働環境を重要視していました。医学部生対象の調査(2022年)でも、90%以上の学生が「診療科を選択する上で労働条件は関係する」と回答しています。若い世代では、男女とも家庭や自分の時間、パートナーのキャリアを重要視していて、そのため外科は敬遠されています。日本消化器外科学会は、このような社会変革に対応できておらず、今後厳しい状況になることが予想されます。消化器外科領域の存続のためには、仕事一筋の「昭和モデル」から、仕事も家庭も大事にする「令和モデル」への変革が必要です。

AEGIS-Women は、仕事と家庭の両立に関しては先端を走っており、令和モデルの実現に必要なものを知っています。2015年に発足した当会は、育児中でもキャリアアップができるように、託児所つき腹腔鏡手術手技セミナーやオンライントレーニング、手術動画の作成等さまざまな取り組みを行ってきました。さらに、当会のコアメンバーで NCD (National Clinical Database)解析を行い、消化器外科医の男女執刀格差や男女の手術短期成績の比較についての論文を『JAMA Surgery』や『BMJ』に発表しました。これらを踏まえて、2023年7月14日第78回日本消化器外科学会総会にて「函館宣言」が発出されました。しかし、多くの課題が残っています。日本消化器外科学会の評議員は、論文業績や学会の司会経験等をもとに選出されており、現在の学会の上層部と同質の人材が引き上げられる制度になっています。消化器外科領域の発展のためには、多彩な人材を重職に登用することが重要ですが、現状ではそうなってはいません。

私たちは、いつまでも支えられる側ではありません。今後は私たちが、消化器外科領域を牽引する時代になるでしょう。消化器外科領域における「令和モデル」の実現に向けて、共に頑張っていきましょう。

3. 「消化器外科医の未来のために」

日本消化器外科学会 理事長

群馬大学大学院総合外科学講座 調 憲 先生



社会全体の価値観が変革した現在において、日本消化器外科学会もマインドセットの変化が必要です。私は毎年医局員約100名と面談をしていますが、ある時一般病院に勤務する30代の男性が「医局を辞めたい」と言ってきました。理由を聞くと、「医師である妻が仕事に復帰する。時間外の急変に対応できなくなるので、もう消化器外科医である資格がない」ということでした。私から病院上層部にチーム制の導入をお願いして、彼を引き留めました。彼は今も元気に仕事をしています。消化器外科医の減少については、対応を先送りしてきた部分があるかもしれません。今後は現実を直視し、皆で力を合わせて方法を考え、希望を見いだしていきたいと思います。

一方で、日本消化器外科学会の女性会員は順調に増えています。今の時代に消化器外科医を目指す方は宝物のような人材で、私は皆さんに消化器外科医になってよかったと思っています。そのために現代の幸せの定義に合った改革を進める必要があります。2020年に男女共同参画のワーキンググループが発足し、その後委員会に昇格しました。野村幸世先生(星薬科大学)を筆頭に、女性消化器外科医の意見集約と支援にご尽力いただいています。また、日本消化器外科学会の長い歴史の中で、野村先生が初めて女性理事となり、現在はさらに田中千恵先生(名古屋大学)にも理事をお願いしています。今年は評議員の女性枠が24名になりました。女性評議員の意見が反映されていけば、学会として必ず良い方向に向かうと思っています。

アンコンシャスバイアスの存在も痛感しています。以前の日本消化器外科学会のホームページの医師の写真は全て男性でしたが、指摘されるまで気が付きませんでした。今後は男女の会員数と学会等の司会者や座長の男女比率もモニタリングする必要があると考えています。さらに、河野恵美子先生(大阪医科薬科大学)が言及された『JAMA Surgery』と『BMJ』の消化器外科医の男女執刀格差と男女の手術短期成績の比較の論文は、本当に大きなインパクトがありました。一方で、育児などを理由に、一時的にせよ高難度手術には

参加せずペースダウンしたいと言う女性外科医もいます。これは支援が不十分である事がその原因の1つである可能性があり、今後改善策を模索していく必要があります。

「函館宣言」は、日本消化器外科学会としては画期的な宣言でした。引き続き、男女執刀格差や内視鏡ロボット手術の実態調査が行われます。キャリアの可視化として若手の手術件数も把握していきます。これまで NCD データを利活用する学会研究を申請するには評議員推薦が前提となっていました。担当理事の上野秀樹先生(防衛医科大学校)のご尽力で評議員推薦を必要としない男女共同参画枠と Under40(40歳未満の消化器外科学会)枠ができました。今回、向山順子先生(東京大学医科学研究所)が提案するライフイベントからの復帰についての研究が採択されました。この研究は当事者や若い世代に参考になるだけではありません。若い世代の消化器外科医に必要な支援を明らかにすることにより、学会として重要な基盤データになると考えています。

消化器外科医減少を食い止めるためには、情報開示は逆効果ではないかという不安がありました。改革のために全てを公表します。労働環境を改善し、男女関係なく心と体の健康を守り、家庭と仕事の両立ができるように整えていきます。キャリア支援では、早期自立促進と、多様な価値観や人生観、働き方を尊重し、男女の均等な活躍を推進します。ライフイベントに関する研究も積極的に進めていきたいと思えます。消化器外科医減少を食い止めて、明るい未来を達成するためには、多様なキャリアを認め合う、性別を問わない消化器外科医の活躍が不可欠ですので、皆さまにはぜひお力添えをいただければと思います。

編集：向山順子、松永理絵、大越香江